難民ワークショップに参加して

ノートルダム清心中・高等学校NDA(Notre Dame Action)委員会が、日本ユニセフ協会広島県支部と協力して毎年行っているユニセフ・ワークショップについて、NDA委員会参与の緒形隆之先生に報告していただきました。

NDA委員会

本校の教育理念『心を清く、愛の人であれ』は、自分を他者のために捧げるという、イエス・キリストの生き方に倣ったものである。この理念により、生徒が中心になって活動しているのがNDA(Notre Dame Action)委員会であり、中高6年間を通じてユニセフ募金、あしなが募金、チャイルドファンド募金、作業所や養護施設との交流などの様々なボランティア活動や奉仕活動を行っている。

ユニセフ・ワークショップ

毎年一回3学期の土曜日の午後に、日本ユニセフ協会広島県支部の協力のもと、ユニセフ・ワークショップを開催している。昨年度は、「難民ワークショップ」の中の「逃げる(2時間)」の部分を中学生、高校生に分かれてそれぞれ体験をした。

①5〜6人のグループに分かれて1つの家族を作り、祖父・祖母・父・母・子などの役割を分担する。
・・・和気あいあいとしながら、これはすんなりと決まる。

②持ち出し荷物カードとカバンが配られ、カードから持ち出す荷物を15個選ぶように指示される。
・・・モノに溢れた今の生徒達にとってはどれも必需品であり、15個に厳選するのは至難であるようだ。また、どのグループも携帯電話が欠かせないらしい。このあたりまでは、どのグループも深刻さはさほどではなく、実に楽しそうであった。

③難民船に乗るために、荷物を半分にするように指示される。
・・・このあたりから現実の厳しさが伝わってきたのか、みな真剣になってきた。荷物の半減に四苦八苦していた。

④ある国に到着し、入国審査のために、パスポートの確認を求められる。
・・・母国を離れ、観光旅行ではなく難民として他国に入国する場合でも、パスポートの重要さをどのグループも改めて認識したようだ。特にパスポートを持っていないグループのメンバーは、どうしたらよいのか困惑状態であった。

⑤家族の一人が病気になり、食糧や医薬品が不足した。
・・・ここまで来ると、難民として生きのびていくことの困難さと惨めさを痛感したようである。また、自分の国が平和で安定であることと、他国の難民に対する支援の必要性を感じたようである。

⑥最後に難民の生活を紹介したビデオを視聴した。

生徒の感想

- 難民体験から、家族を失う辛さや、国を追われる悲しさを感じた。
- 少人数で、全員が発言できたり、一体感が生まれて、積極的に参加できた。
- 実際の難民の人々の生活が、私達の想像以上に苛酷なものだと思った。
- 今の私達の生活は当たり前ではなく、奇跡的なものだと思った。
- 難民問題は限られた地域の問題ではなく、世界全体の問題だと思った。
- 現地に行くことは難しくても、日本にいて出来ることは多くあると思うので、積極的に活動に参加していきたい。今の恵まれた環境に感謝し、多くのことを学んでいきたい。

考 察

『他者への愛』とは言葉では簡単に言えることだが、実際には自分自身に痛みを伴う行為である。しかし一方で、他者と共に『命』を分かち合うことによって豊かにされることを意味する。時間と空間を超えて実行可能なこの普遍的な原理を、生徒達がこの度のワークショップを通していくらかでも理解してくれたのではないかと思う。